

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和7年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第6号（9月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



テレホンサービス : 099-296-6430
(7～9月) : 099-296-6431

ホームページアドレス : <https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス : nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|--|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理, 安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期, 適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守) |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海等への汚染防止)
(養蚕, 養蜂等への危被害防止) |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和7年度 病害虫発生予報 第6号

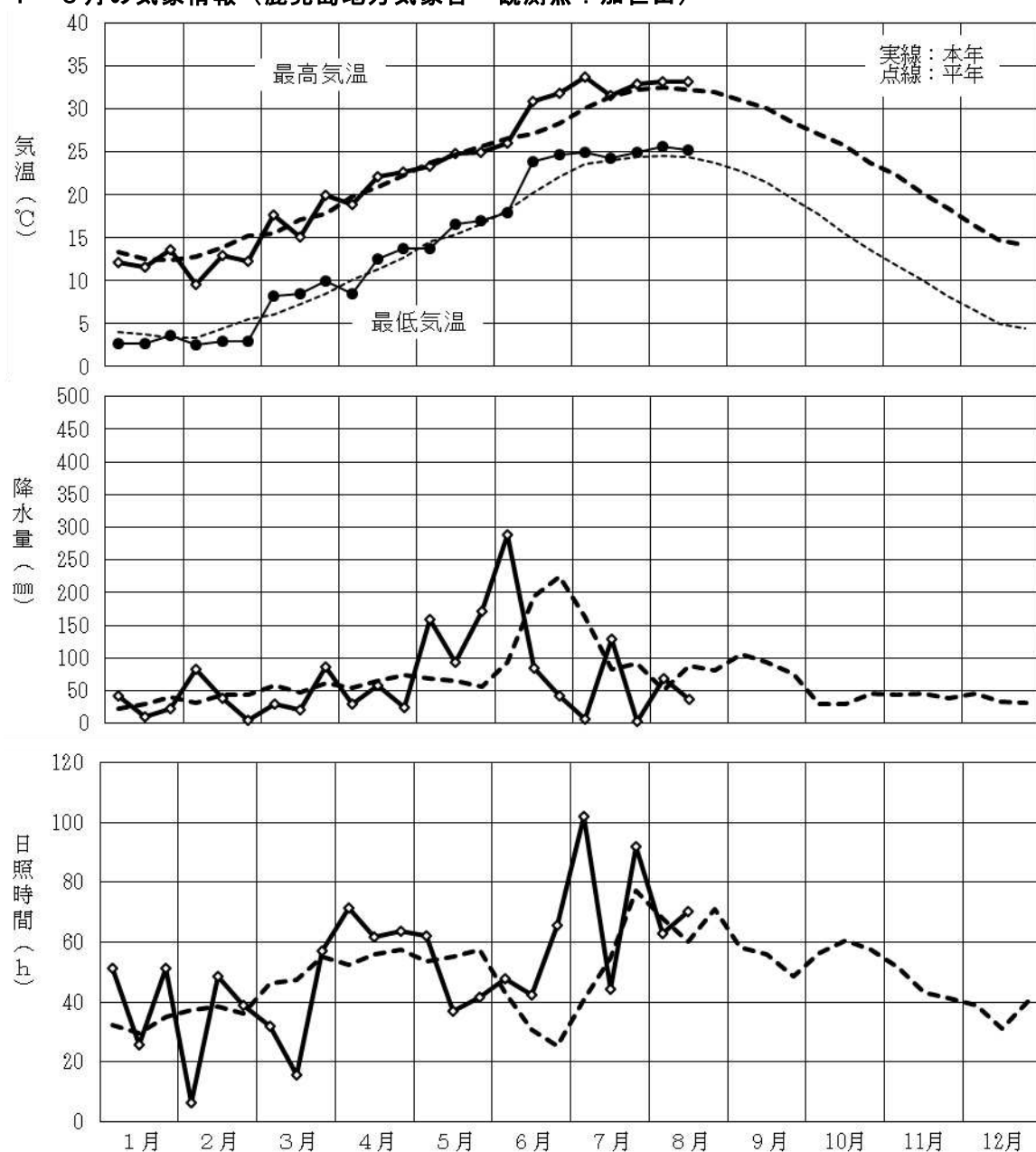
令和7年8月28日
鹿児島県病害虫防除所

【気 象 概 況】

I. 向こう1か月の予報（8月23日から9月22日） 令和7年8月21日 鹿児島地方気象台 発表

		低い(少ない)	平 年 並	高い(多い)	
気 温	九 州 南 部 奄 美 地 方	1 0 1 0	1 0 2 0	8 0 7 0	九州南部，奄美地域ともに 気温は平年より高く，降水 量は平年並か少なく，日照 時間は平年並が多い。
降 水 量	九 州 南 部 奄 美 地 方	4 0 4 0	4 0 4 0	2 0 2 0	
日照時間	九 州 南 部 奄 美 地 方	2 0 2 0	4 0 4 0	4 0 4 0	

II. 4～6月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	普通期水稻	いもち病（穂いもち）	やや少	やや少
		紋枯病	並	やや多
		トビイロウンカ	並	やや多
		コブノメイガ	並	並
	サツマイモ	ナカジロシタバ	やや多	多
野菜	イチゴ（苗床：子苗）	炭疽病	やや少	やや少
		ハダニ類	並	やや多
	サトイモ	疫病	やや多	やや多
	根深ネギ	ネギハモグリバエ	やや多	多
		アザミウマ類	やや多	多
花き	キ ク	ハダニ類（県本土：施設）	少	やや少
		アザミウマ類（県本土：施設）	少	やや少
野菜・花き共通		ハスモンヨトウ	やや少～多	やや多
		シロイチモジヨトウ	やや多～多	やや多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		黒点病（県本土・熊毛地域）	少	少
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや多	多
〃（奄美地域）	やや多	やや多		
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		新梢枯死症	並	並
		網もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少
		チャハマキ	やや多	やや多
		チャノホソガ	並	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	やや多	多
		カンザワハダニ	やや多	やや多

【病 害 虫 発 生 予 報】

I. 普通作物

1. 普通期水稻

(1) いもち病（穂いもち）

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

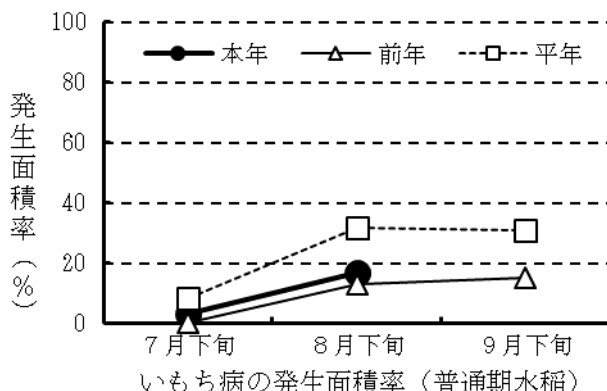
(ア) 調査結果 発生量：やや少

葉いもちの発生面積率 17% (平年 32%)

：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 稲の葉に朝露が長く付着するような山間部等で葉いもちの発生が多い場合は、穂揃期に液剤又は粉剤で補完防除を行う。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生面積率 11% (平年 13%) : 並

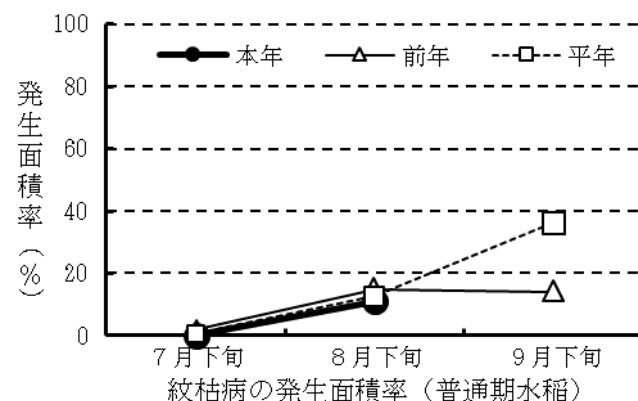
(イ) 気 象

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 現在、発生が認められているほ場で出穂後も病勢が進展する場合は、早急に液剤又は粉剤で防除する。

(イ) 昨年、多発したほ場では、特に注意する。



(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生面積率 23% (平年 32%)

：並

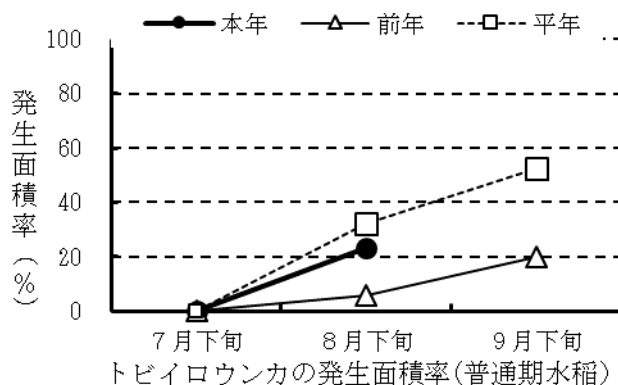
(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 今回確認した幼虫は、さつま町の誘殺日、さつま柏原のアメダス気象データから、防除適期は6月27日の飛来に由来する第3世代幼虫が9月15～19日頃、6月30日の飛来に由来する第3世代幼虫が9月18～23日頃と予想される(図)。

(イ) 9月以降に出穂期を迎える「あきほなみ」「あきのそら」などの中～晩生品種では、被害が発生する恐れがあるので、農薬のラベルをよく見て収穫までの日数など登録内容を遵守し、



防除する。

(ウ) トビイロウンカは、稲の株元に生息しているので、粉剤や液剤で防除する場合は、薬剤が株元に十分届くよう散布する。

(エ) 発生状況は地域やほ場によって異なり、同一ほ場内でもスポット的に株元に発生しているため、ほ場全体を観察し、本虫の発生を確認する。

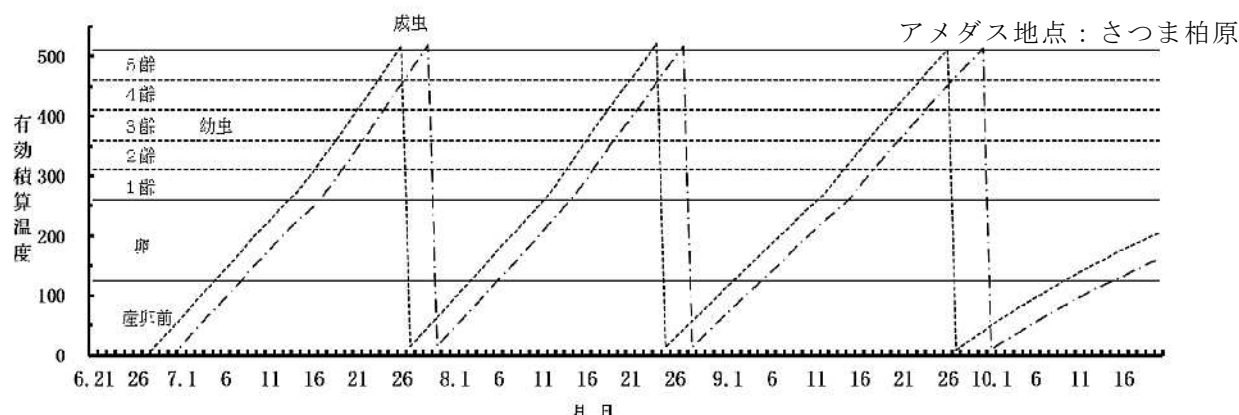


図 トビイロウンカの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、アメダスポイントデータを利用した(8/21まで実測値, 8/22から平年値)。

なお、気温の高い地域では予測より2～4日程度早くなる。

(4) コブノメイガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生面積率 41% (平年 42%)

：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 中晩生品種については7月11日、

7月18日の飛来に由来する第2世代成虫の発蛾最盛日は9月14日、9月24日頃と予測され、粉剤または液剤による防除は発蛾最盛日の7日後に行う(図)。

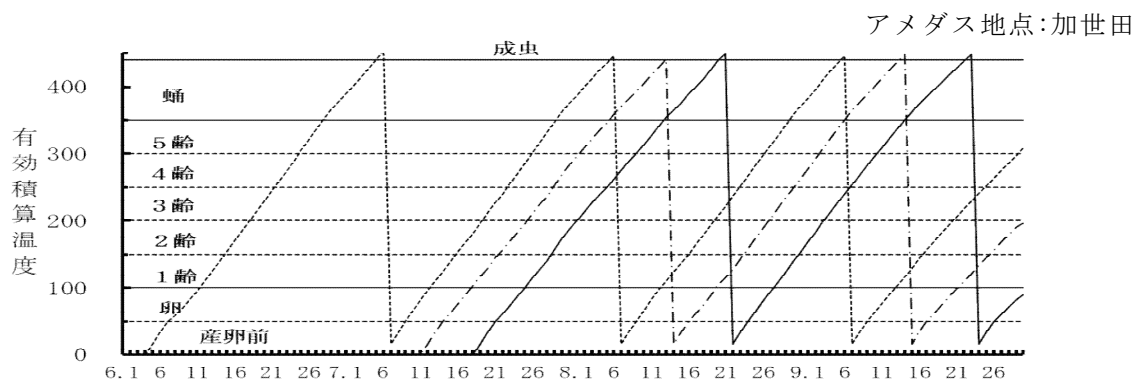
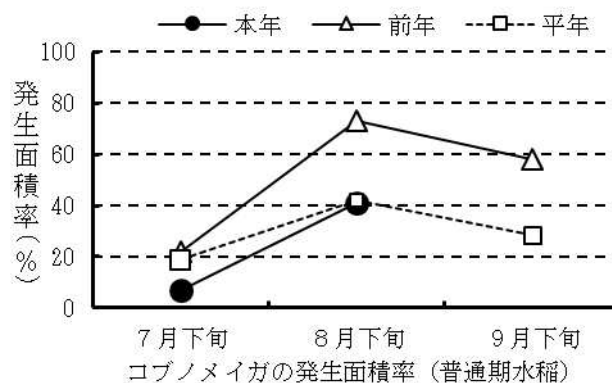


図 コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測図

注) 気温は、アメダスポイントデータを利用した(8/21まで実測値, 8/22から平年値)。

なお、気温の低い地域では予測より2～4日程度遅くなる。

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生面積率 77% (平年 68%)

：やや高い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

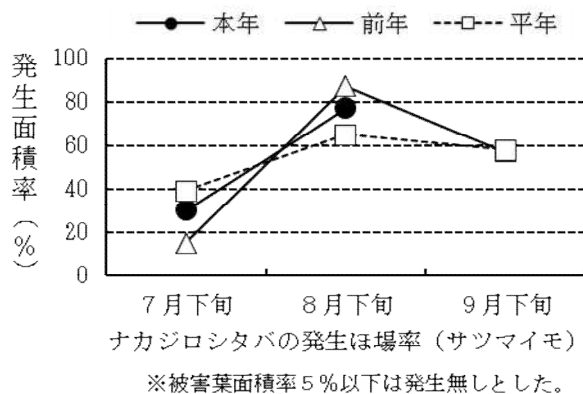
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢幼虫が多くみられる時期に防除する。

(イ) 農薬散布後も幼虫の発生量が多い場合は、追加防除を行う。

(ウ) ハスモンヨトウの発生が見られる場合は、同時防除が可能である。



防除に関する今月の留意事項

1. 斑点米カメムシ類 (令和7年度技術情報第12号, 令和7年8月8日付参照)



(1) 発生状況等

ア 8月4日～6日に普通期水稻周辺のイネ科雑草地(28地点 112箇所)を調査した結果, 斑点米カメムシ類の捕獲箇所率は81.3% (平年 80.1%), 平均捕獲虫数は7.2頭 (平年 7.1頭) と平年並みである。なお, アカスジカスミカメの甚発生が一部の地点で認められる。

イ 県全体における斑点米カメムシ類の程度別発生箇所割合は, 中程度以上が18.8% (平年 22.2%) と平年並みである。

ウ 県全体の種別構成比の割合はアカスジカスミカメが46.7%と最も割合が高く, 次いでホソハリカメムシ, クモヘリカメムシ, シラホシカメムシ, イネカメムシの順に高い。

エ 県全体のイネカメムシの捕獲箇所率は4.5% (平年 11.7%) と低く, 平均捕獲虫数も0.1頭 (平年 0.4頭) と低い。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 水田周辺の雑草地などが飛来源となるので, 出穂の10日前頃までに畦畔の草払いなどほ場管理に努め, 発生密度の低下を図る。

イ 斑点米カメムシ類の防除は, 穂揃期と穂揃期の7～10日後(乳熟後期)の2回防除が基本である。特に乳熟後期の幼虫の発生には十分注意する。

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

（1）炭疽病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 やや少

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 10%（平年 21%）

：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）灌水はできるだけ水滴が小さくな

る灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

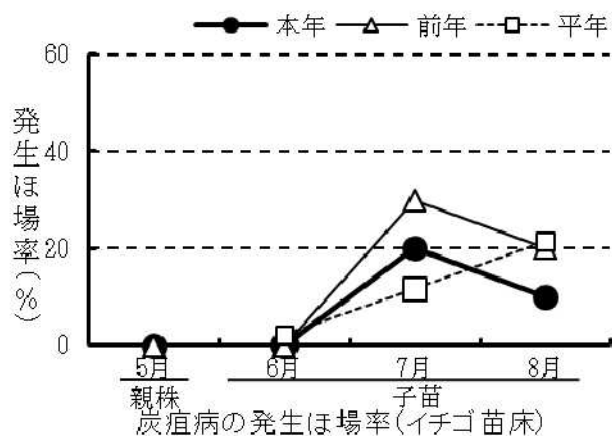
（イ）苗は十分な間隔を置いて並べ、通風を図る。

（ウ）雨よけ、防風対策を徹底する。

（エ）生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

（オ）農薬による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

（カ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



（2）ハダニ類（令和7年度技術情報第10号，7月25日付参照）



ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 やや多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：並

発生ほ場率 40%（平年 46%）：並

（イ）気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

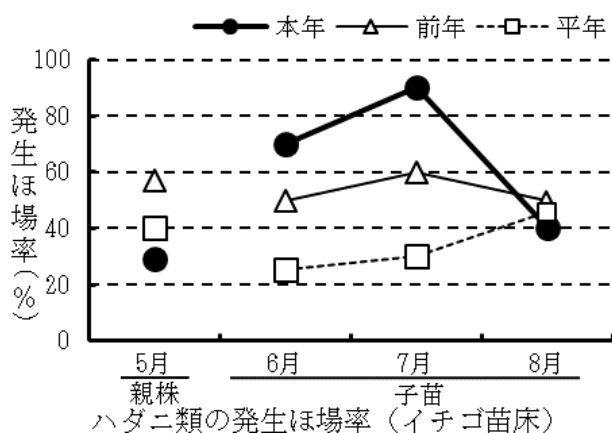
（ア）下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

（イ）子苗の防除を徹底し、本ぼへの持ち込みを防ぐ。

（ウ）農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

（エ）農薬によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する

（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 60% (平年 61%)

：並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

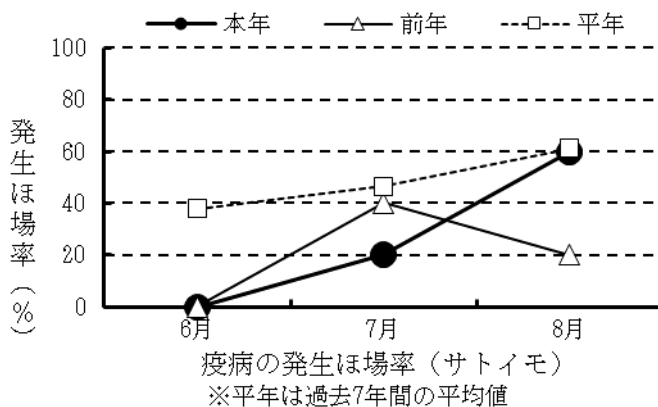
(ア) サトイモ生育後半の疫病の発生は、収量に大きく影響しないものの、軟腐病の発生や塊茎の腐敗を助長するため、安全使用基準を遵守し、適正な防除に努める。

(イ) 発生ほ場では、直ちに治療効果のある農薬を7日間隔で散布する。なお、未発生ほ場でも予防散布を行う。

(ウ) 農薬散布後に葉が長時間濡れていると、薬害がでる恐れがあるので、農薬は速やかに乾く時間帯を選んで散布する。なお、防除体系の詳細については普及情報(令和3年度)を参照する。



(エ) 収穫後のくずいも・親いも等の残さは、ほ場や周囲に残ると発芽して翌年の発生源となるので、ほ場外へ持ち出し適正に処分する。また、茎葉等の残さは早めにすき込み分解させる。



3. 根深ネギ

(1) ネギハモグリバエ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 67%

(平年：-%, 前年：50%)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

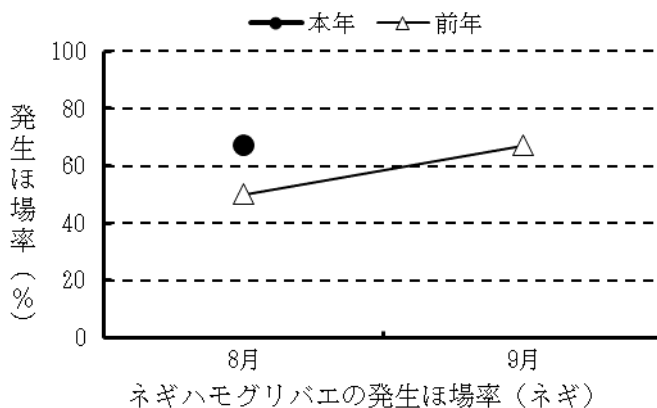
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生している系統は「B系統」で、多数の白色食害痕を生じるため、早期防除を徹底する。

(イ) 作用性の異なる農薬(RACコード参照)のローテーション散布を行う。

(ウ) 本虫の寄生した被害葉及び収穫残さをほ場に残すと、次の作型の発生源となるので、地上部に残らないよう処分を徹底する。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 17%

(平年：-%，前年：0%)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

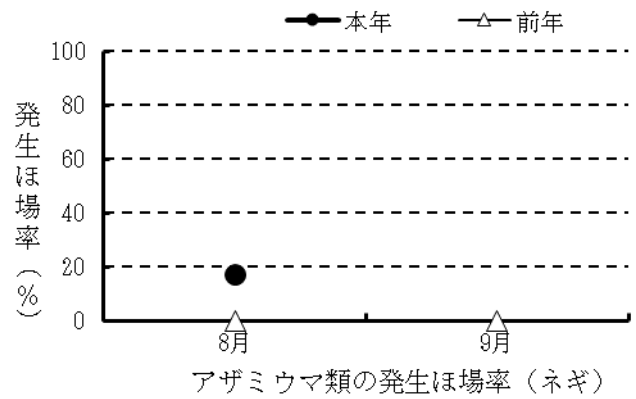
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 白いかすり状の食害痕の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を確認し，早期発見と早期防除に努める。

(イ) 作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布を行う。

(ウ) ほ場内及びほ場周辺の除草に努める。

(エ) 収穫後の残さは次の作型や周辺作物の発生源となるので，地上部に残らないよう処分を徹底する。



Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 20%（平年 39%）：低い

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

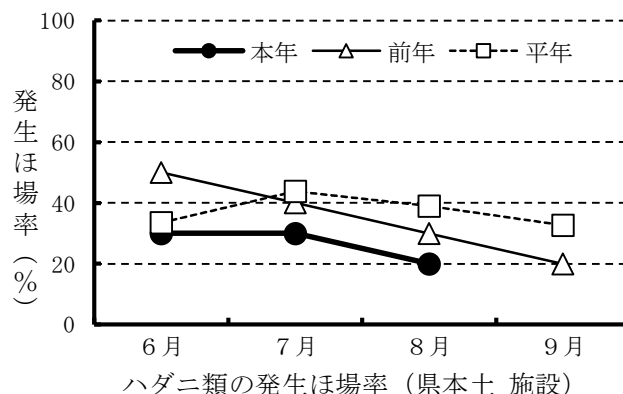
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等で

スポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 20%（平年 39%）：低い

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

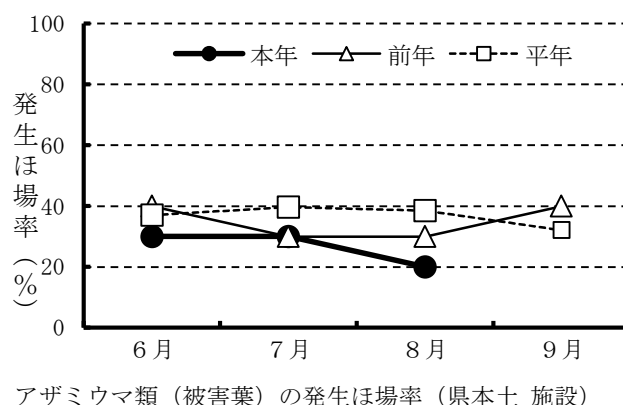
(ア) アザミウマ類の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

(イ) ミナミキイロアザミウマは主に新葉に寄生し、クロゲハナアザミウマは中下位葉に主に寄生している。防除はよく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が新葉だけでなく中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



IV. 野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
(イ) 対象作物 イチゴ、サトイモ、
根深ネギ、キク等
(ウ) 発生量 やや多

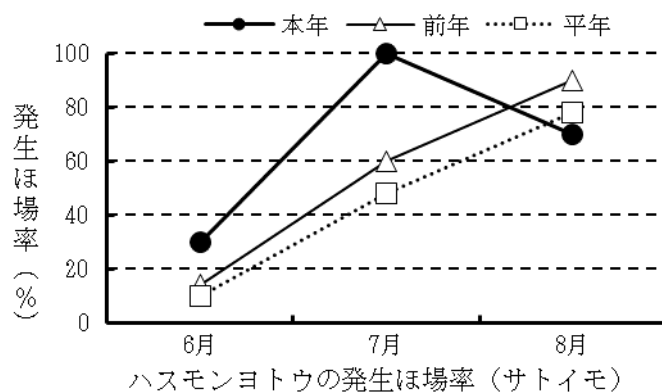
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少～多

各作物での発生状況

作物名	発生ほ場率 (%)			概 評
	本年	平年	前年	
イチゴ	20	11	0	やや多
サトイモ	70	78	90	やや多
根深ネギ	25	-	8	多*
キク	0	2	0	やや少

※根深ネギは令和6年度から調査のため、前年比による概評を記載



発生程度の高いほ場を認めた (+) (サトイモ)

7～8月のフェロモントラップ総誘殺数：やや多

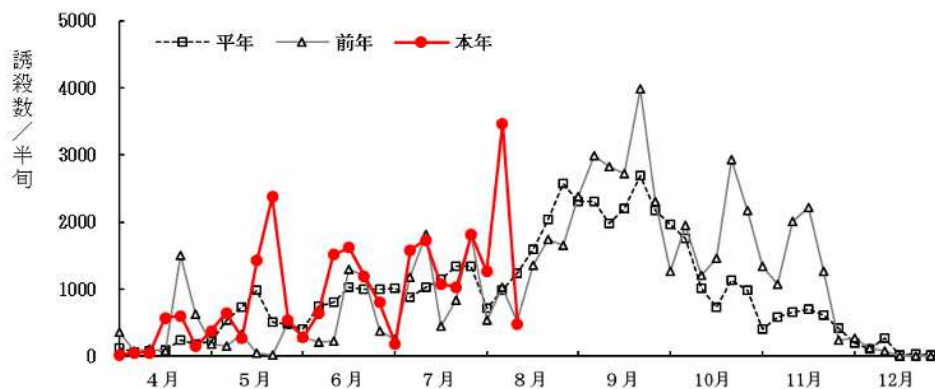
	南さつま市	鹿屋市
発生量	やや多	-
誘殺数 (7月1半旬～8月3半旬)	12,619頭 (平年9,675頭)	10,677頭 (-) *

※鹿屋市は令和6年度から調査

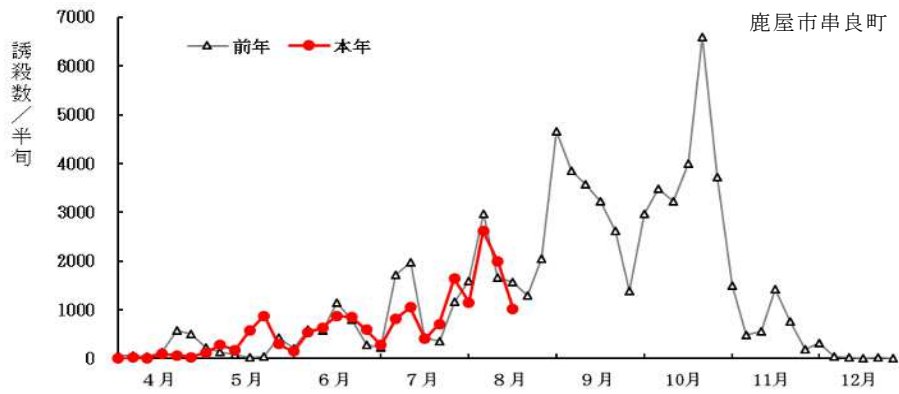
ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り幼虫の発生状況を確認する。
(イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生を目安にする。
(ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
(エ) 中・老齢幼虫になると農薬が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
(オ) 一部のジアミド系農薬 (クロラントラニリプロール, フルベンジアミド) に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。

南さつま市金峰町



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況 (南さつま市)



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況（鹿屋市）

※令和6年度から調査

（2）シロイチモジヨトウ

ア 予報内容

- （ア）発生地域 県本土
- （イ）対象作物 根深ネギ，キク等
- （ウ）発生量 やや多

イ 予報の根拠

- （ア）調査結果 発生量：やや多～多

各作物での発生状況

作物名	発生ほ場率（％）			概 評
	本年	平年	前年	
根 深 ネ ギ	42	-	0	多*
キ ク	20	1	0	やや多

※根深ネギは令和6年度から調査のため、前年比による概評を記載

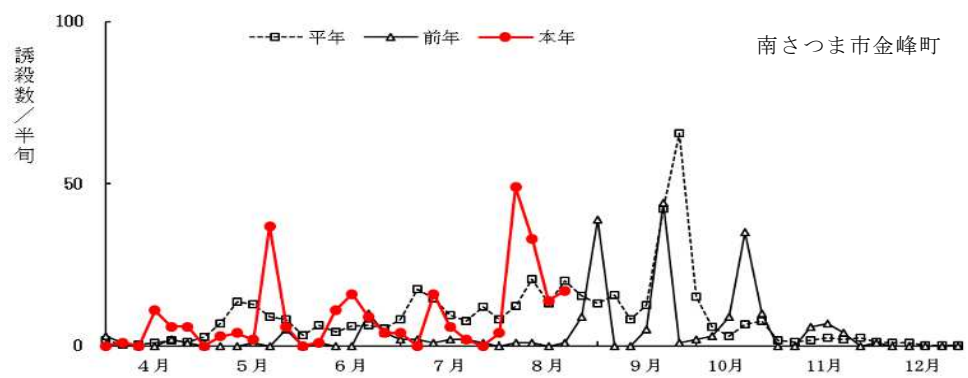
7～8月のフェロモントラップ総誘殺数：並

	南さつま市	鹿屋市
発生量	並	-
誘殺数（7月1半旬～8月3半旬）	114頭（平年111頭）	232頭（-）*

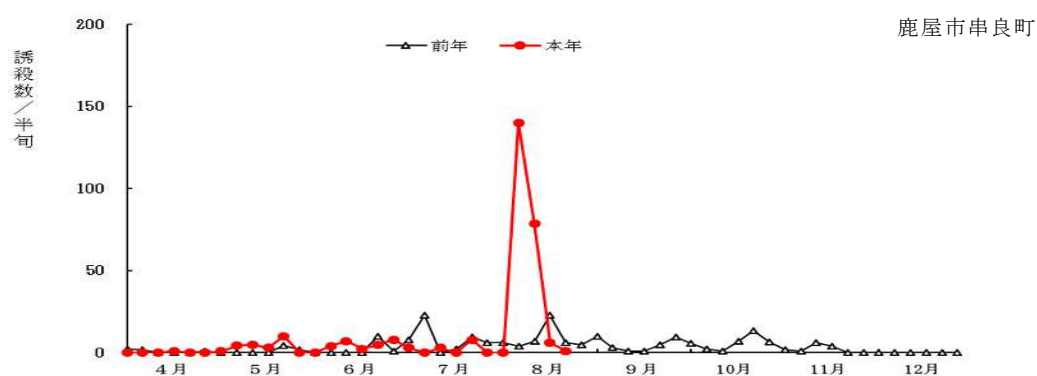
※鹿屋市は令和6年度から調査

ウ 防除上注意すべき事項

- （ア）発生状況は作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り幼虫の発生状況を確認する。
- （イ）若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害するので、発生を目安にする。
- （ウ）卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- （エ）中・老齢幼虫になると農薬が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
- （オ）一部のジアミド系農薬（クロラントラニリプロール，フルベンジアミド）に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺状況（南さつま市）



フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺状況（鹿屋市）

※令和6年度から調査

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域（果実） 並

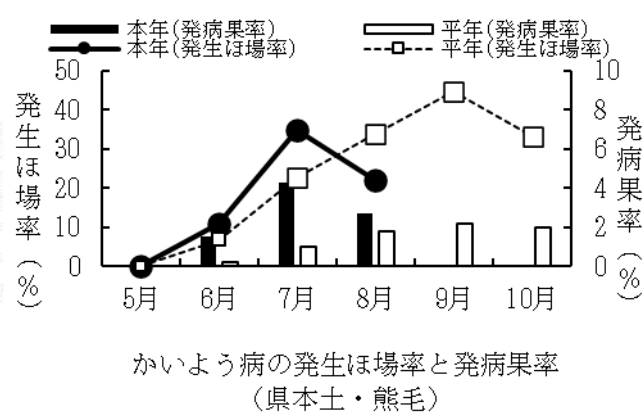
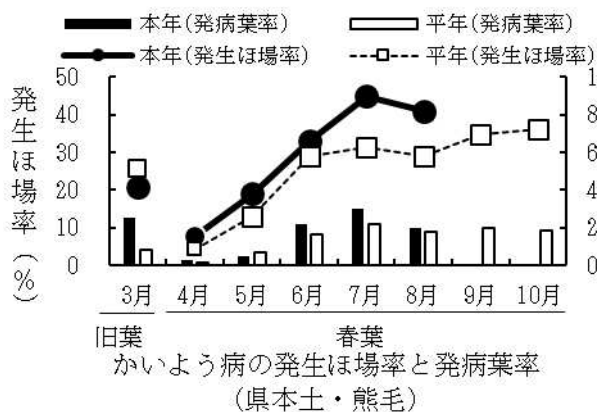
奄美地域（果実） やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	41%（平成 29%）：やや高い	22%（平成 34%）：やや低い
発病率	2.0%（平成 1.7%）：並	2.7%（平成 1.8%）：やや高い
発生程度	発生程度は低い（－）	発生程度の高いほ場を認めた（＋）



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	やや多
発生ほ場率	0%（平成 0%）：並	29%（平成 11%）：高い
発病率	0%（平成 0%）：並	0.3%（平成 0.1%）：やや高い
発生程度	－	発生程度は低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、枝の風揺れを防止する支柱や防風網を設置して風傷の発生を軽減する。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 少

奄美地域(果実) やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量 : 少

発生ほ場率 17% (平年 41%) : 低い

発病果率 0.2% (平年 7.7%) : やや低い

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量 : やや少

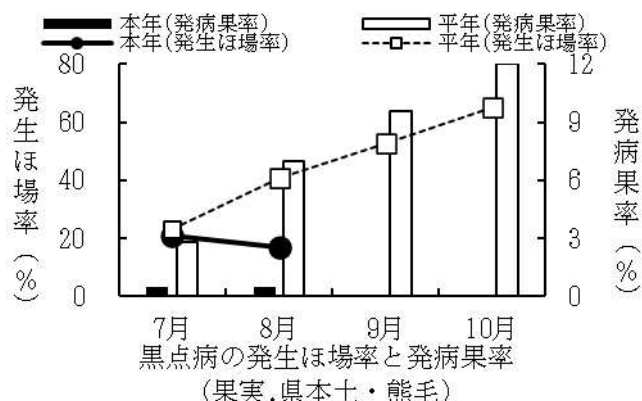
発生ほ場率 0% (平年 4%) : やや低い

発病果率 0% (平年 0.1%) : やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除は累積降水量 200~250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多いため、薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の設置により防除の目安とする。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定枝は園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量 : やや多

発生ほ場率 30% (平年 25%) : 並

寄生葉率 8.1% (平年 4.3%) : 高い

発生程度の高いほ場が認められた (+)

(イ) 気象予報

気温 : 高い (+)

降水量 : 平年並みか少ない (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : やや多

発生ほ場率 29% (平年 4%) : 高い

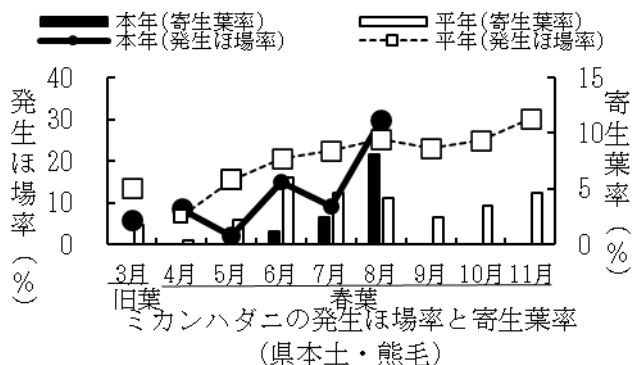
寄生葉率 1.6% (平年 0.6%) : やや高い

発生程度は低い (-)

(イ) 気象予報

気温 : 高い (+)

降水量 : 平年並みか少ない (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1 葉当たり雌成虫数 0.5～1.0 頭（寄生葉率で 30～40%）を目安に防除する。
(イ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

防除に関する今月の留意事項

1. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

- ア 予察灯におけるツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシの誘殺虫数は出水市、いちき串木野市及び鹿屋市、南さつま市ともに平年より少なく推移した。
- イ 出水市では 5 月第 4 半旬に一時的に増加したが、その後減少し、8 月第 5 半旬にチャバネアオカメムシの誘殺虫数が 1,087 頭（平年 1,716 頭）と増加し、その他の地域でも増加が確認されている。各予察灯における最新の誘殺虫数は鹿児島県病害虫防除所ホームページを参照。
- ウ 餌植物（ヒノキ）球果の県本土の着果量は、球果量指数 36（平年 48）で平年に比べて少ない結果数が少ない地域では寄主植物から離脱する時期は早い傾向があるので注意する（発生予報第 4 号（7 月）参照）。
- エ ヒノキ球果の口針鞘数（吸汁痕数）は、4 月以降、平年に比べて少なく推移したが、いちき串木野市の調査地点（球果量はやや少）では 8 月 15～18 日の調査で 10.8 本/果と 8 月上旬の 0.2 本/果に比べて多くなった。ヒノキ球果（餌植物）から離脱する目安は 25 本/果であり、平年の到達時期は 9 月下旬であるが、一部の地域では果樹園等へ飛来時期は早まる可能性がある。
- オ ヒノキ樹上で球果に寄生するカメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）の幼虫・成虫の捕獲虫数は平年に比べて少ない。

表 ヒノキ球果の口針鞘数（カメムシ類の吸汁痕数）（単位：本/果）

調査地点	地点数	調 査 月 日			
		7/1～7/8	7/25～7/30	8/1～8/6	8/15～8/18
南さつま市	1	0.0	0.0	0.5	3.3(10)※
いちき串木野市	1	0.0	2.1	0.2	10.8(23)
日置市	1	0.1	0.5	5.7	5.4(13)
阿久根市	1	0.0	0.1	4.3	6.2(20)
出水市	1	0.1	1.3	2.2	6.1(24)
さつま町	1	0.0	0.5	2.8	7.8(21)
霧島市	2	0.0	0.5	0.9	2.5(7)
曽於市	2	0.1	0.2	2.2	2.9(13)
平均 本年	10	0.0	0.6	2.2	5.0
前年	8	1.0	4.0	8.5	13.0
平年	8	0.4	2.5	6.3	10.0

注 1) 平年は 2015 年～2024 年の 10 年間の平均。表中の () ※は口針鞘数の最大値を示す

2) カメムシがヒノキ球果から離脱する目安は口針鞘数 25/果

表 ヒノキ樹上におけるカメムシ類の調査時期別の平均捕獲虫数（単位：頭/枝）

年次	7月前期		7月後期		8月前期		8月後期	
	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
本年	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.2
前年	0.0	1.8	0.0	0.1	0.4	0.3	0.0	0.3
平年	0.1	1.0	0.4	0.5	0.5	1.2	0.3	1.4

注 1) 平年は 2015 年～2024 年の 10 年間の平均

2) 捕獲虫数は 5 樹の各 1 枝（計 5 枝）に直径 80cm の捕虫網を被せて採取した数値

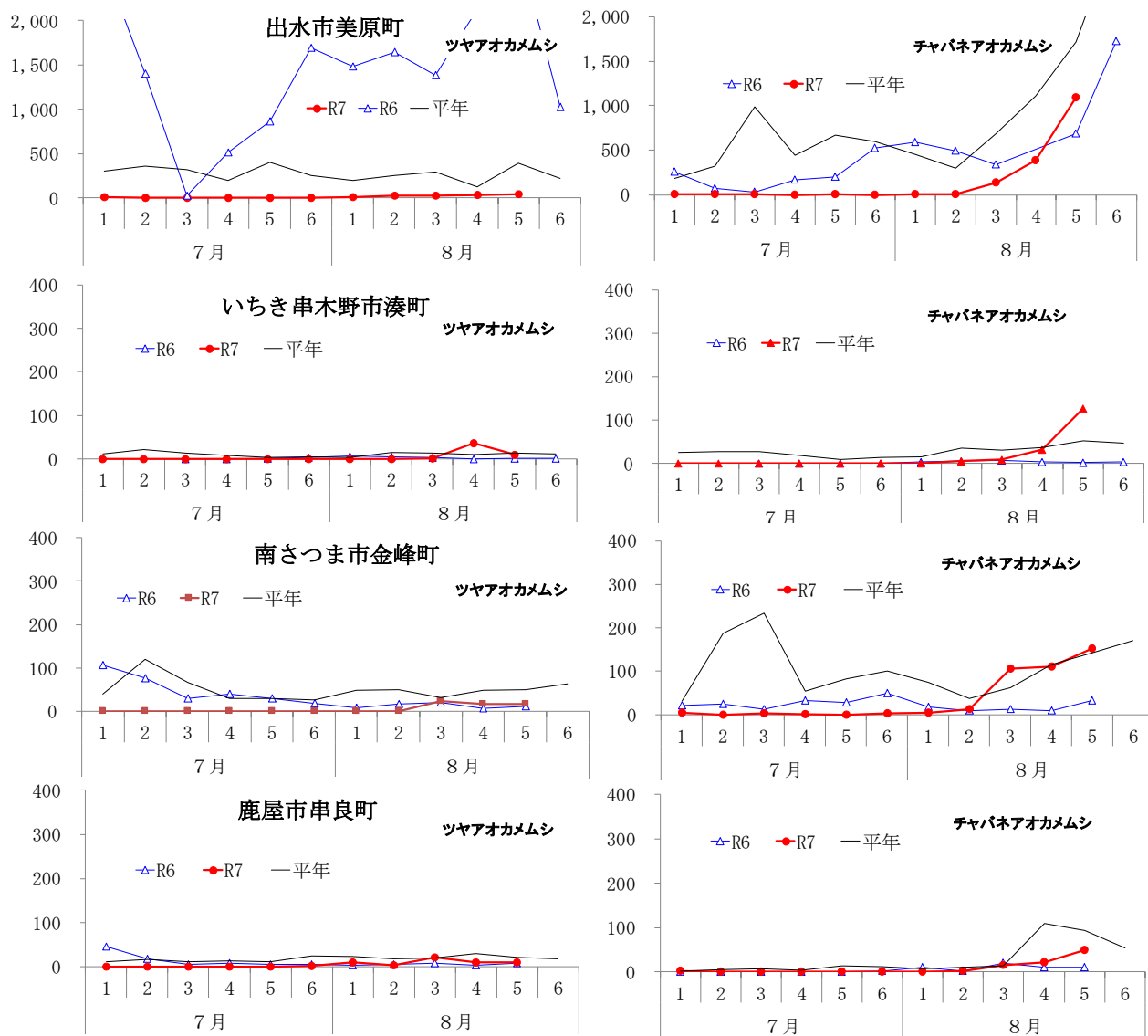


図 予察灯における果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

注 1) 平年は 2015 年～2024 年の 10 年間の平均値

2) 予察灯の光源は、南さつま市金峰町は水銀灯 100W、鹿屋市串良町は捕虫灯 20W、他は捕虫灯 40W

3) グラフの縦軸は半旬毎の誘殺虫数

(2) サビダニ類

ア 昨年多発したほ場では発生する場合が多いので、防除に努める。

イ 秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。

(3) 果実吸蛾類

果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄いカンキツに集まりやすい。

ア 幼虫の食草（アケビ、ムベ、アオツヅラフジ等）除去や夜間の成虫捕殺、防蛾網（7.5～10mm 目）を設置する。

イ 恒久的な対策として、黄色忌避灯を主体とした集団点灯を行う。

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 53% (平年 56%) : 並

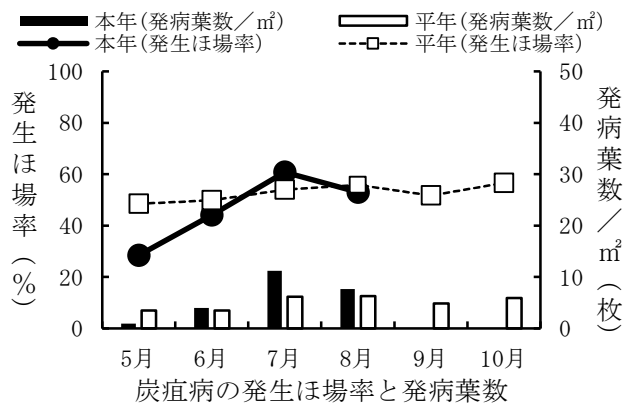
1 m²当り病葉 7.6 枚 (平年 6.3 枚) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽萌芽期～1 葉期に予防剤を散布したほ場では、3～4 葉期に治療剤を散布する。

(イ) 秋芽萌芽期～1 葉期に予防剤を散布していないほ場では、2～4 葉期に予防剤と治療剤の混用散布を行う。

(ウ) 伝染源の病葉が少ないほ場でも、長雨により多発する恐れがあるので防除を行う。



(2) 新梢枯死症 (輪斑病菌による)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量(輪斑病) : 並

発生ほ場率 32% (平年 37%) : 並

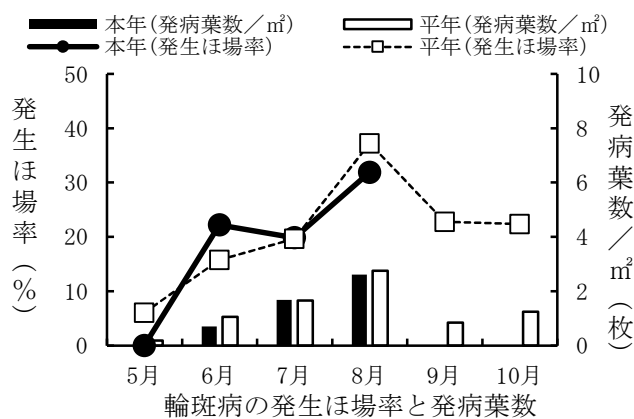
1 m²当り病葉数 2.6 枚 (平年 2.8 枚)

: 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生が多く、秋芽萌芽期～3 葉期に降雨が多いと多発する。

(イ) 炭疽病との同時防除が可能である。



(3) 網もち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 1%) : やや低い

1 m²当たりの病葉数 0 枚 (平年 0.03 枚)

: 少

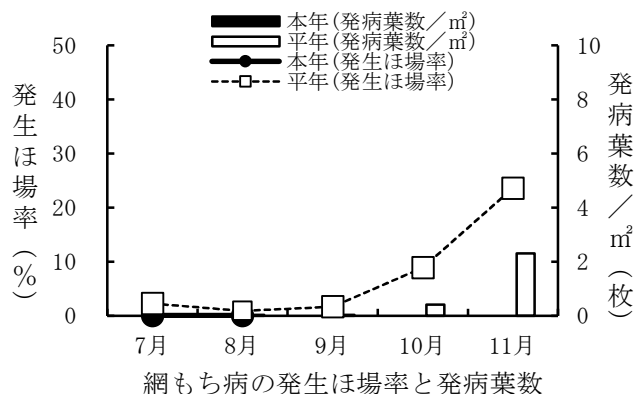
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。

(イ) 炭疽病には強いが網もち病には弱い「あさのか」等の品種は予防的に防除を行う。

(ウ) 更新園であつても周辺に発生源があると多発するおそれがあるので防除を行う。

(エ) 常発園では、3～4 葉期の防除に加えて、9月上旬にも銅剤等で防除する。



(4) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

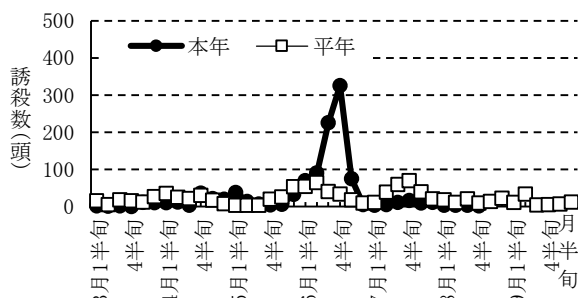
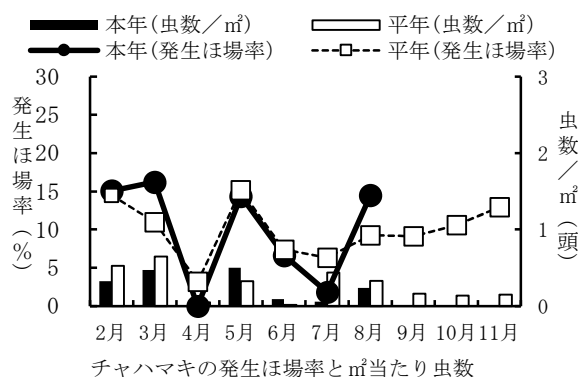
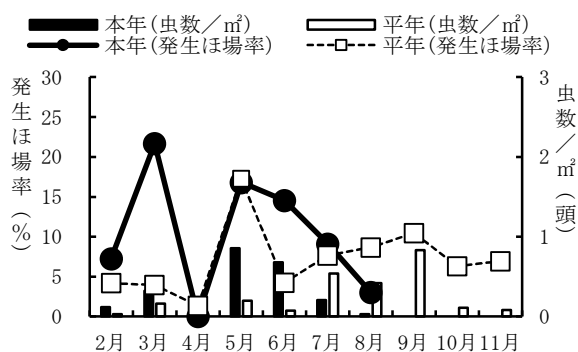
(ア) 発生地域	県本土
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ やや少
	チャハマキ やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

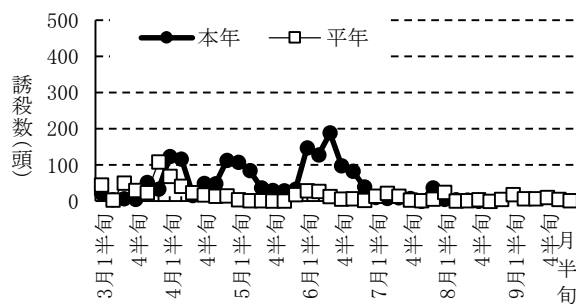
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	やや少	やや多
発生ほ場率	3% (平年9%) : やや低い	14% (平年9%) : やや高い
m ² あたり虫数	0.0頭 (平年0.4頭) : 少	0.24頭 (平年0.30頭) : 並
【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】		
誘殺数* (7月1半旬~8月4半旬)	66頭 (平年298頭)	84頭 (平年90頭)

* 平年は過去3年間の平均値



(南さつま市金峰町)

※ 平年は過去3年間の平均値



(南さつま市金峰町)

※ 平年は過去3年間の平均値

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。

特にチャハマキは、夏期より秋期に発生が多い傾向にあるので発生に注意する。

(イ) 農薬による防除適期は、ふ化～2 齢期（発蛾最盛日の 10～15 日後）である。

(ウ) 一部でジアミド系農薬に対する感受性が低下しているので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(5) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

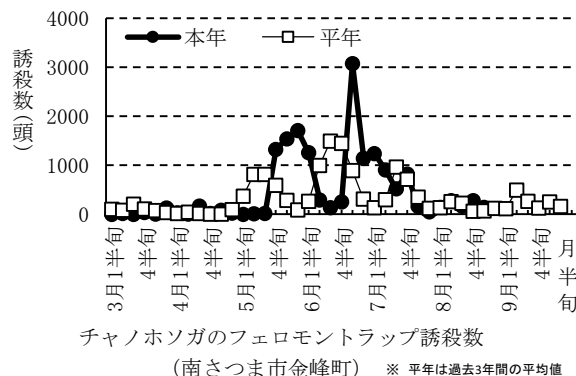
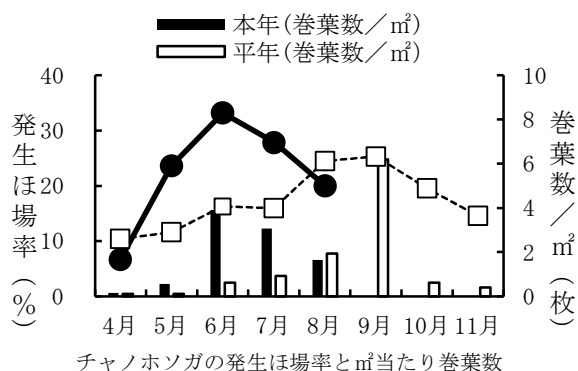
【巡回調査】

発生ほ場率 20% (平年 24%) : 並

m²当たり巻葉数 1.6 枚 (平年 1.9 枚) : 並

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数 (7月1半旬~8月4半旬) 3,475 頭 (平年 3,277 頭) * 平年は過去3年間の平均値



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、適期防除に努める。

(イ) 一部でジアミド系農薬に対する感受性が低下しているので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(6) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 多

チャノキイロアザミウマ 多

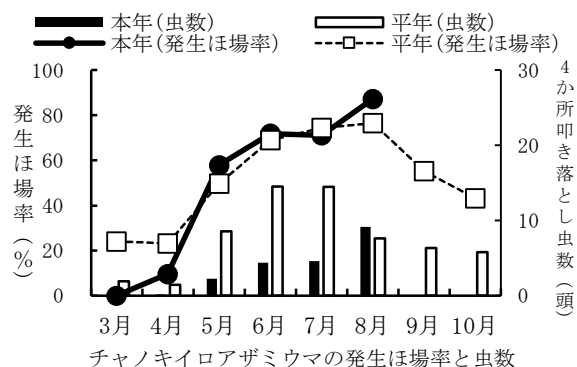
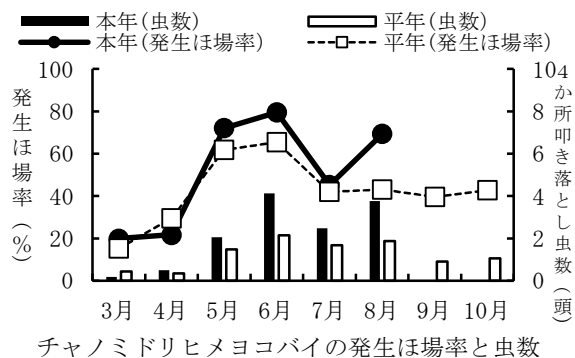
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	多	やや多
発生ほ場率	69% (平年 43%) : 高い	87% (平年 77%) : やや高い
虫数 (4 か所たたき落とし)	3.8 頭 (平年 1.9 頭) : 多	9.1 頭 (平年 7.6 頭) : やや多

(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続し、樹体への影響も大きいので、芽の生育状態に合わせた防除を心がける。特に晴天が続くと多発する場合があるので注意する。
- (イ) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいので秋芽の防除を徹底する。

(7) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

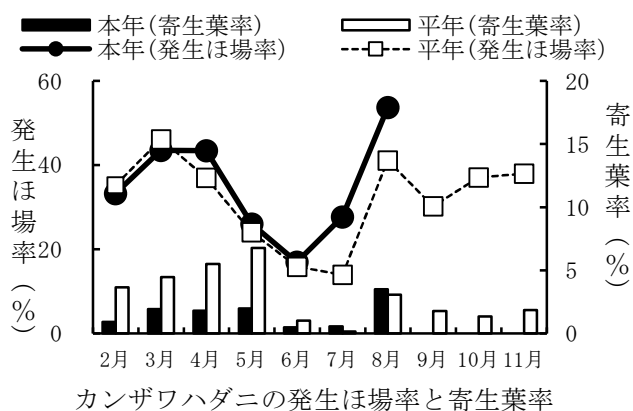
発生ほ場率 54% (平年 41%)

：やや高い

寄生葉率 3.5% (平年 3.1%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない農薬を使用する。
- (イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがある。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は，住宅地及び畜舎に隣接するほ場や，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で 10 日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう 1 か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去 10 年間の平均値を使用。